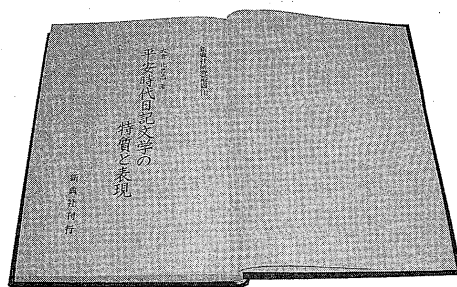


新刊紹介

大倉比呂志著

『平安時代日記文学の特質と表現』

石坂妙子



2003年4月10日発行
新典社
A5判 286頁
定価 7500円(本体)

平安時代の日記文学を研究する際、先行研究の樹海に踏み入る度に、斬新な発想と的確な方法で日記文学観を提示する先達の文献に出会う。大倉比呂志氏は、そのような優れた研究者のおひとりである。この度上梓された『平安時代日記文学の特質と表現』は、昭和四十六年に始まる氏の日記文学研究の集大成であり、日記文学とは何かという問いを不断に問い続けてきた氏の回答の書である。本書の第一の特色は、書き下ろしの論四編を含めて、平安時代の日記文学全体を俯瞰しつつ論じる姿勢を強く打ち出している点にある。全体の構成は、「序章 日記文学研究に向けて」「第一章 土左日記の特質」「第二章 蜻蛉日記の特質」「第三章 和泉式部日記の特質」「第四章 紫式部日記の特質」「第五章 更級日記の特質」「第六章

讃岐典侍日記の特質」第七章 成尋阿闍梨母集の特質——「ひとりごと」から作品形成へ——「おわりに——日記文学における今後の課題に向けて」という七章から成る。『土左日記』から『成尋阿闍梨母集』までを網羅するような構成に顕著なのは、各作品の「特質と表現」を探る試みを通じて、日記文学に備わる普遍的な性格を炙り出そうとする強固な意思の存在である。結論からいえば、「自己戯画化」の思想が日記文学の根底にある、というのが氏の主張にはかならない。けれども、その明解な概念に辿り着く前に、ここではまず氏の論の特長である表現分析の鮮やかさに注目してみたい。本書のなかで質量ともに最も充実している『蜻蛉日記』論では、上巻の執筆契機(第二章第一節)、下巻の叙述方法の転換(第

二章第三節)の指摘が興味深く迫ってくる。道綱母が上巻の執筆を思い立った契機とは何か。それは安和二年閏五月の死を意識するほどの病であり、兼家への遺書をしたためるなかで「兼家との夫婦関係がはかないままでこの世を終えてしまうことにいいしれぬ兼家への〈不満〉と〈執着〉とを覚えて、」「遺書には書き切れない〈情念〉を兼家に投げかけたのが上巻だった」という。愛憎を綯い交ぜた兼家への思いが、「遺書」を書くという行為をきっかけに、長い身の上の物語執筆へと道綱母を誘っていった、という見通しは〈情念〉と表現との密接な関係に鋭く言及した卓論といえよう。さらに、氏は下巻の道綱母に作者としての「変容」を読み取る。兼家とのほかない世の中を描くことに集中してきた上・中巻を経て、下巻は道綱や養女に関する記事も多く含んだ「多面的」な身の上話の様相を呈している。氏は、まずその多面性を主題の分裂や拡散と捉えるのではなく、「兼家という照射すべき対象が喪失したことを意味する」ものであり、「それが上中巻より一層「かげろふ」的」なほかなさの表出となっていると読み解く。そして身のはかなさをそのような「逆説的な方法」で印象づけようとする「作者道綱母」には、意図的に「読者を翻弄させたいたかな女」の存在を認めるべきである、という。書く道綱母の方法の

深化を探り出し、「したたかな」表現者と位置づける氏の論は、『蜻蛉日記』にとっては最良の読解といえるのではないだろうか。

『更級日記』論では、孝標女の「浮舟」志向（第五章第三節）がどのように「醸成」されたのが丁寧な跡づけられる。殊に、姉の夢に現れた侍従大納言女の生まれ変わりと称する猫が孝標女を「中の君」と呼んでいる事実に着眼したあと、姉と孝標女が「大君」「中の君」と並び称される『源氏物語』でいえば宇治八の宮家の「大君」「中の君」を彷彿とさせる姉妹であったこと、「中の君」孝標女は宇治の「中の君」に容易に同化したであろうこと、姉の「大君」を失うという共通した境遇のなかで「大君」の「ゆかり」として物語の浮舟に傾倒していったであろうことが、量みかけるようにあるいはひとつの謎解きのように提示される。ひとつのキーワードの背後に広がる文学的発想の沃野を垣間見るのはこのような論に出会った時であるといえよう。

そして、本書の日記文学観を如実に表すキースワードは既に述べたように「自己戯画化」である。氏は日記文学は作者の失われた「過去の軌跡」の「再創造」であり、「作者自身の新たな人生史」の構築であると定義づける。そのうえで、新たな自画像を描く表現上の特色として共通するのが

「自己戯画化」であるという。なぜ自画像が戯画的に表されなければならないのか。この点に関しても氏の回答は明解である。「喪失」による絶望的状况を回復しようとしても回復しきれない焦燥を作者が感じ取った時、その精神的圧迫から逃れ出ようとする苦肉の策であり「作者のへあがき」であると（序章）。この「自己戯画化」という概念は、本書のなかで「自己卑下」「自嘲」「自虐」「自己嫌悪」とも重なる意味合いで提唱されている。『入唐求法巡礼行記』に端を発した「自己戯画化」は、『土佐日記』においては自尊心をいたく傷つけられても抵抗できなかった貫之の不面目を戯画的に描いたものであり（第一章第一節）、『蜻蛉日記』は作者道綱母が意図的に、乖離していく兼家との仲に執着しあがく道綱母の様子を「戯画化」して点在させ、身の上のはかなさを逆説的に浮かび上がらせた作品である（第二章第五節）という。そして、『紫式部日記』は、「おいらけもの」の仮面を被り「戯画的な態度」を取りつつ周囲との調和を図った紫式部（第四章第一節）の、結局は憂愁の念を払拭できなかった「敗北の人生史」をかたどった作品であり（第四章第二節）、『更級日記』は物語や歌、伝承的世界を「幻想」として退けようとしながら執着を捨てきれず、仏道に帰依しきることすらままならず「ただよふ」孝

標女の自画像を「自嘲的に戯画化して」語った作品であると結論する（第五章第一節）。

このような氏の立論の特色は、「主人公」の人生描写に潜む表現上の矛盾や落差が、過去を回想して書く「作者」の救済志向とその痛ましい挫折の思いを垣間見せる綻びのようなものであると解析し、そのような作者の情念が再び「主人公」の人生を染め上げるという、日記文学における往還の表現構造を析出して見せたところにあるといえよう。「主人公」と「作者」の相貌が離れては重なり合う微妙な表現世界が氏の日記文学論で明らかにされているのである。「主人公」を操作し読者を誘導しさえする「作者」の「演出」や「したたかさ」を指摘して「主人公」と「作者」の離れを示唆し、その一方で両者の微妙な同化や近距離感を読み取る読解の手腕が本書では存分に発揮されている。日記文学とは「自己戯画化」の文学である、という定義を突きつけられた我々に残された課題は、そうした氏の日記文学観と研究的手法をいかに引き継いでいくことができるのか、という問題に尽きるといわなければならない。